

俳句

【小学1年生・2年生】

特選 じいちゃんをつくるやきいもおいしいな

亀山小学校2年 山内 春陽

（評）スーパーに行くと、やきいものはんばいコーナーがあり、食よくをそそられます。作者の「じいちゃん」のやきいもは、そんなよそらのものとは比べものにならないくらいおいしいのでしょう。その作り方や、やきかげんを知りたいです。もしかして、「じいちゃん」がそだててしゅうかくしたさつまいもかもしれないですね。「じいちゃん」といつしよに食べる作者の様子が見えるようです。「やきいも」は冬の季語です。

（彦根文芸協会 林 尚子）

特選 まだかなあスイカのたねをうえたんだ

城東小学校1年 横山 琉

（評）「スイカ」は秋の季語です。（角川書店 俳句歳時記） 作者は、なかのよい友だちに話しているのでしょうか。それとも、ひとり言なのでしょうか。スイカの発ががとても気になってる様子がうかがえます。作者の気持ちがそのまま俳句になりました。声に出して、色々な調子で（心配そうに…ほこらしげに…等々）読んでみると楽しい作品です。

（彦根文芸協会 林 尚子）

特選 あかとんぼひとさしゆびにきてほしい

平田小学校1年 伊東 岳

（評）目を閉じてそうぞうしてみます。作者は、人さし指を立てて赤とんぼをおいかけているのでしょうか。いえいえ、むらがる赤とんぼの中にいて、そっと人さし指を出したのかもしれない。作者のすなおでまっすぐな思いが読み手に伝わってきます。赤とんぼが指に止まってくれるまでの時間も大事にしたい一句です。「あかとんぼ」は秋の季語です。

（彦根文芸協会 林 尚子）

特選 いてきますあけたらすぐにおおあせだ

金城小学校1年 柳田 都羽

（評）「あせ」は夏の季語です。二〇二四年の夏は朝から本当にあつかったです。げんかんのドアを開けるとモワッとする空気が全身におおいかぶさって、あせが出てきます。そのしゅん間の出来ごとをとらえて、十七音にまとめたすきな作品です。元氣いっぱいあいさつして、出かけていく作者のすがたが目にはうかびます。

（彦根文芸協会 林 尚子）

準特選 ついにきょううんどうかいだたのしみだ

城西小学校1年 高橋 侑誠

(評) 「うんどうかい」は秋の季語です。「ついにきょう」の上五の言葉から、作者は、今日のうんどう会を待ちに待っていたのでしょう。これまで何度もくり返してれん習してきた成かをみんなに見てもらえる日がやっときたのですね。思わず「がんばれ!」とおうえんしたくなる俳句です。

(彦根文芸協会 林 尚子)

準特選 とんでいるえんまこおろぎかっこいい

城北小学校1年 太田 幸佑

(評) えんまこおろぎは、ふだんだけの低い草原やかれ草の下などにかくれています。とんでいるすがたを見るなんて、作者のかんさつ力におどろいています。そして、下五で「かっこいい」とストレートに言い切っているのがすばらしいです。羽を左右に広げてとぶえんまこおろぎの勇ましい姿は、作者にとってあこがれかもしれません。「えんまこおろぎ」は秋の季語です。

(彦根文芸協会 林 尚子)

準特選 なんはいめホクホクあまいもごはん

鳥居本小学校1年 森本 愛由

(評) 「いも」は秋の季語です。よほどおいしいもご飯だったのですね。作者は、「おいしい」と書いてはいないのですが、「なんはいめ」の五音から、いもごはんがおいしくておいしくて、おかわりしたことがわかります。また、擬態語「ホクホク」からは、たきたての温かいごはんということもわかる一句になっています。言葉のえらび方が上手です。

(彦根文芸協会 林 尚子)

準特選 くりのふくとゲトゲぬいでおをだす

城東小学校2年 満重 湧

(評) 「くり」は秋の季語です。トゲトゲのいぐさの中に、二、三個のくりがぎゅつとかたまつてつまっています。われないがのすき間からくりを取り出すには、ちよつとしたコツがいるのです。作者は、実さにくりひろいを体けんしたのでしょうか。つやつやのくりと会話しながら、ていねいに取り出している様子が目にうかびます。

(彦根文芸協会 林 尚子)

準特選 さつまいもみんなでわけっこおいしいな

稲枝東小学校1年 高岸 瑛真

(評) おいしいものを「みんなでわけっこ」すると、よりおいしいと感じます。み

んなで話したことやみんなの笑顔まで、その時に食べたさつまいもの味と重なって、わすれられない思い出になったことでしょう。作者のやさしい人がらがうかがえます。「さつまいも」は秋の季語です。

(彦根文芸協会 林 尚子)

準特選 かきごおりシャリシャリたべるおいしいな

稲枝東小学校1年 川口 時慧

(評) よく冷えたかき氷をおいしそうに食べている作者のすがたが見えるよう

です。作者が、スプーンで氷をくずす様子も、口に入れた時の様子も、「シャリシャリ」という音で伝わります。擬音語を上手に使ってできた作品です。「かきごおり」は夏の季語です。

(彦根文芸協会 林 尚子)

佳作 うんどう会みんなのこえがびびいてる

城西小学校2年 小川 花椰

佳作 かまきりがバッタをムシャリ食べている

亀山小学校2年 北村 優樹

佳作 いちごがりかぞくみんなでいきたいな

城西小学校1年 辻 結翔

佳作 おとうさんといっしょにつくるゆきだるま

城西小学校2年 山田 大翔

佳作 さつまいもどこまでのびるつちのなか

城東小学校1年 屋敷 百音

佳作 くりひろいひろってひろってたのしいな

城北小学校2年 岡崎 史悠

佳作 運動会五十メートル走ったよ

稲枝西小学校2年 疋田 湊

佳作 つうがくろきんもくせいがいいにおい

亀山小学校1年 山口 絆太

佳作 うんどうかいみんなでげんきにおどります

亀山小学校1年 尾田 拓音

佳作 でっかいぞきれいなおつきひかってる

稲枝東小学校2年 中川 華瑠

佳作 コスモスがゆらゆらゆれておどってる

鳥居本小学校1年 大武 秀暢

佳作 さあいくぞあきのゆうひにホームラン

鳥居本小学校1年 寺村 将希

佳作 きれいだなひらひらおちるいちようのは

稲枝東小学校1年 瀧 陽佳理



入選 ぬけましたほってひっぱりさつまいも

城東小学校1年 荒木 結仁

入選 なつやすみびわこでおよぐたのしいな

金城小学校1年 川崎 匠真

入選 きれいだなきいろとあかいもみじさん

稲枝東小学校1年 川橋 涼

入選 まつぼっくりかたちがさんかくふしぎだね

亀山小学校1年 本庄 琥叶

入選 むしつかみなまえをつけてうれしいな

鳥居本小学校1年 林 柚希

入選 おにやんまいっぱいきたよつかまえた

亀山小学校1年 若林 美詩

入選 ひらひらともみじがまうよきれいだな

稲枝東小学校2年 大西 和奏

入選 ハロウィンこわいおばけがいっぱいだ

稲枝東小学校2年 土田 朝陽

入選 やきいもだホカホカしててあっちっち

稲枝東小学校2年 大橋 蒼人

入選 さつまいもたくさんほるぞたのしみだ

城西小学校1年 平島 謙志

入選 はじめてのみんなでたきびたのしいな

城西小学校1年 豊村ゆずは

入選 たのしみだなつ休みにはなにしよう

金城小学校2年 城戸 菜月

入選 まつたけがはいったごはんおいしそう

亀山小学校2年 北川 大起

入選 さつまいいいっしょにたべようおいしいよ

城北小学校2年 菊井 綾乃

入選 あかとんぼきれいなはねがあるんだよ

稲枝西小学校1年 居原田 歩乃華

入選 いもほりよでかいのでこいおねがいだ

城北小学校1年 田中 大揮

入選 ながればし見たらラッキーきれいだな

稲枝西小学校2年 馬場 彩遙

入選 みんなでねたこをさわったヌルヌルだ

城西小学校1年 大塚 璃子

入選 くりひろいたくさんひろうお兄ちゃん

稲枝東小学校2年 荻野 紘人



【小学3年生・4年生】

特選 流れ星言い終わるまで待つてよね

佐和山小学校4年 大前 香穂

（評） 秋は、空が澄んで流れ星が多く見られます。現れたかと思うと、尾をひいてたちまち消えてしまいます。流れ星には、消えてしまうまでに願いごとをするとかいうという言い伝えがあります。

夜空にぐう然見つけた流れ星に、何とか願いを伝えたいという気持ちで、「言い終わるまで待つてよね」の話し言葉に強く表れています。願いごとをする作者の姿があざやかに浮かんできます。季語は「流れ星」（秋）です。

（彦根文芸協会 小早川 悦子）

特選 おつきみのだんごをにぎるははの手よ

旭森小学校4年 北村 七緒

（評） 作者の家では、十五夜のお月見の日には、お母さんの手作りのだんごをお供えして、まん丸のお月様をめるのでしようね。「ははの手よ」と、「よ」で終わっていることで、お母さんがお供えするだんごを一つずついいねいにぎっている様子が伝わってきます。季節の行事を大切にされているご家族です。きですね。季語は「おつきみ」（秋）です。

（彦根文芸協会 小早川 悦子）

特選 こおろぎを見つけたみんなこっちきて

旭森小学校4年 赤田 獅琉

（評） クラスの友だちと虫さがしをしていたときでしょうか。草むらの中に、こおろぎがいるのを見つけたんですね。「みんなこっちきて」と呼びかけている言葉から、こおろぎを早くみんなに見せたくてたまらない気持ちが伝わってきます。とてもはつらつとした俳句で、喜びにあふれています。季語は「こおろぎ」（秋）です。

（彦根文芸協会 小早川 悦子）

特選 三姉妹分け合い食べるマスカット

平田小学校4年 永田 亜美

（評） 季語は「マスカット」（秋）です。マスカットは香りが高く、酸味と甘みのバランスがよく、粒も大きなものが多いため、食べごたえ抜群で人気の品種です。おいしそうなマスカットを目の前にして待ちきれない三姉妹。「分け合い」の言葉から、大きな房にいっぱい実をつけたマスカットを一粒一粒味わいながら食べる仲のよい三姉妹の姿が浮かびます。「おいしいね。」「うん、とてもあまいね。」など、会話ははずんだことでしょう。

（彦根文芸協会 小早川 悦子）

特選 たのしみはなび大会なん分後

金城小学校3年 村上 沙奈

（評）季語は「はなび大会」（夏）です。夏の楽しみは、何といっても花火大会。大輪の花のように、夜空に高く打ちあがる花火は、子どもだけでなく大人にとっても楽しい夏の風物詩です。

花火大会の日は、家族そろって早くから出かけて待っているのでしょうか。「なん分後」の言葉から、今か今かと期待に胸をふくらませながら待っている様子が手にとるように伝わってきます。待ちに待ったすばらしい花火の連続、きつと夏の楽しい思い出になったことでしょう。

（彦根文芸協会 小早川 悦子）

特選 いいにおいふりかえったらきんもくせい

亀山小学校4年 古瀬 渚彩

（評）季語は「きんもくせい」（秋）です。秋になるとオレンジ色の小さな花をいっぱいつけて甘いよい香りをふりまくきんもくせい。

学校からの帰り道でしょうか。見えないのに、どこからかいいい香りがただよってきて、思わずふり返ったんですね。そこにはきんもくせいが。きんもくせいを見つけたときの作者の喜ぶ顔が目には浮かびます。甘い香りに包まれて楽しい下校の道になったことでしょう。

（彦根文芸協会 小早川 悦子）

準特選 ミニトマトかんだしゅんかんあすっぱ

金城小学校4年 藤田 蒼大

（評）季語は「ミニトマト」（夏）です。小さくて赤くて、つやつやしていてとてもおいしそうなミニトマト。作者は「きつとおいしだろうな。あまいだろうな。」と期待に胸をふくらませていたことでしょうか。（自分が育てたのならなおさら。）「あすっぱ」と思わず出た言葉、この言葉に食べたときのおどろきが見事に表現されています。すっぱくて顔をしかめる表情も思い浮かびます。

（彦根文芸協会 小早川 悦子）

準特選 さるすべり木がつるつるですべりだい

佐和山小学校4年 沼波 葵

（評）季語は「さるすべり」（夏）です。さるすべりは、夏の暑さにも負けず、紅や桃色のちりめん状の花が群がって咲きます。その幹は猿もすべり落ちるといので、さるすべりと名づけられました。作者は、さるすべりの幹をよく観察しさわってみて、「つるつる」だと気付き表現しました。このように「見る」「さわる」などの五感をはたらかせることで、実感をともなった俳句になります。また「つるつる」の様子から、「すべりだい」に例えているのが、すばらしい発想です。

（彦根文芸協会 小早川 悦子）

準特選 さらさらと聞こえた音は作り滝

城北小学校4年 中島 知音

(評) 暑い中、滝の近くに立つと涼しく感じますね。作り滝は、暑さをしのぎ涼しさを呼ぶために、庭などに作られ、人工的に水を岩の上から落として滝のようにしたしかけです。

作者は、耳をすませて聞こえた音を俳句の中に上手に取り入れました。少しずつとぎれなく流れる音を「さらさら」と的確に言葉を選んでいきます。この言葉から周りを涼やかにする作り滝の様子が伝わってきます。季語は「作り滝」(夏)です。

(彦根文芸協会 小早川 悦子)

準特選 ころもがえふくがっぱいまようね

旭森小学校4年 神丸 大珠

(評) 季語は「ころもがえ」(夏)です。「ころもがえ」とは、季節の移り変わりに合わせて衣服をかえることです。春から夏に変わるとき、服そうは大きく変わりますね。

きっと作者の家には、好きな夏服がたくさんあるのでしょうね。「まようね」の心のつぶやきから、「好きな服がっぱいあるからなかなか選べないよ。」と少しこまった様子が伝わってくると同時に、あれこれ選んでいる楽しさが感じられます。夏のはじまりを感じ、きつとわくわくしているのですね。

(彦根文芸協会 小早川 悦子)

準特選 どんぐりのやじろべえゆらわらう

城東小学校3年 立石 慈音

(評) 季語は「どんぐり」(秋)です。秋になると、林の中にはたくさんどんぐりが落ちています。どんぐりを使ってどんぐりごまや人形作りなどを楽しむことができます。「やじろべえ」もその一つです。

バランスをとうとうと左右に揺れるやじろべえの様子を、「ゆらゆらわらう」とユーモアを交えて表現したことで楽しさが伝わる句になりました。やじろべえをあやつる作者のえ顔も浮かびます。

(彦根文芸協会 小早川 悦子)

準特選 いもうとのてのひらみたいもみじかな

城東小学校3年 古布 彩人

(評) 季語は「もみじ」(秋)です。秋が深まると、きれいに色づき葉を落とすもみじ。

作者は、もみじの葉を見ていて、妹のかわいいてのひらを思い出したのでしょうね。「もみじ」を「いもうとのてのひら」にたとえることで、もみじの葉は妹のてのひらみたいにかわいいなあと思う作者の気持ちが伝わってきます。その気持ちが最後の「かな」(感動を表す)に込められています。

(彦根文芸協会 小早川 悦子)

準特選 音だけで花火そうぞう楽しめた

城南小学校4年 前田 茉帆侶

(評) 季語は「花火」(夏)です。

夏の楽しみである花火大会。作者は、花火大会に行けなくて遠くから花火のあがる音を聞いていたんですね。打ちあがる音からいろいろな想像するなんてすばらしい感性ですね。「そうぞう」の言葉から、作者が空高く打ちあがりたり連続してあがつたり、仕かけ花火だつたりと、美しい色の花火を次々思い浮かべて楽しんでいる様子が広がりました。「楽しめた」ときっぱり言い切っているところがそう快かです。

(彦根文芸協会 小早川 悦子)

準特選 もみじのはあながあいててかおみたい

亀山小学校3年 田中 大貴

(評) 季語は「もみじ」(秋)です。秋にもみじの葉は赤や黄にそまり、しばらくすると葉を落とします。そんな落ち葉の中に、あなのあいてる葉もよく見かけます。作者にはあなのあいたもみじが人の「かおみたい」に見えて楽しくなってきたんですね。このように何かを似ているものに例たとえると、すてきな俳句になりますね。「あなのあいたかおみたいなもみじ」を想像すると、読み手もクスツとわらえてきます。

(彦根文芸協会 小早川 悦子)

準特選 くりひろいたくさんとおすそわけ

稲枝西小学校4年 富江 椿

(評) 季語は「くり」(秋)です。秋になるといがをまとったくりがたくさん実り、地面に落ちます。

家族とくり拾いに行つて、たくさんのかくりをとってきたのでしょうか。「おすそわけ」の言葉から、自分の家族だけで食べるのはもったいない、よその家にもおいしいくりを食べてもらいたいという作者のやさしい気持ちが伝わります。温かみのある俳句になりました。

(彦根文芸協会 小早川 悦子)

準特選 どんぐりがひゅーっと木からおっこちる

亀山小学校3年 山内 泉澄

(評) 季語は「どんぐり」(秋)です。秋になると、どんぐりの実がたくさんできます。林の中を歩いていると、あちらこちらでどんぐりが落ちる音が聞こえます。

作者は、どんぐりの落ちる音を「ひゅーっ」と自分の感じたままの言葉で表現したところがすばらしいです。風が吹ふくと同時に落ちてきたのでしょうか。耳をよくはたらかせて聞いたままを表現すると臨場感あふれる俳句になりますね。

(彦根文芸協会 小早川 悦子)

準特選 うちの猫窓に座ってつきをみる

城東小学校4年 國枝 奈乃葉

(評) 季語は「つき」(秋)です。秋の十五夜の月は、一年でもっとも美しいといわれる満月で、その日にはすすきや団子をそなえ、月をながめて楽しみます。作者の家では、家族だけでなく飼^かっている猫もいっしょにお月見をしているのでしょうか。猫もおぎようぎよくすわって月を見ているなんてすてきです。並んで月を見ている猫と家族のかわいい後ろ姿が浮かびます。美しい月と仲のよい家族と猫のあたたかさがマッチした美しい俳句です。

(彦根文芸協会 小早川 悦子)



佳作 トンボだなうろちよろしてめがまわる

旭森小学校4年 高居 剛佑

佳作 あきかぜがわたしのよこをふきとおる

亀山小学校3年 荒金 咲彩

佳作 帰り道いい匂いだな金もくせい

城東小学校4年 池田 未弥

佳作 落ち葉たち踏むとザクザク音が鳴る

稲枝東小学校3年 堀口 珠輝

佳作 うんどう会つないだバトンわすれない

平田小学校4年 松尾 英

佳作 どこからかきんもくせいのいいかおり

城北小学校4年 大鳥井 杏

佳作 読書の秋図書館行ってしあわせだ

鳥居本小学校3年 林 咲良

佳作 満月の光で照らす彦根城

平田小学校4年 榎木 心咲

佳作 紅葉が静かな山を色づける

旭森小学校4年 小堀 玲奈

佳作 七夕に願いが叶う短冊だ

稲枝東小学校3年 掛谷 朋広

佳作 ひこねじょうあきのけしきにつつまれる

稲枝東小学校4年 白石 惇

佳作 ひまわりはたいようみたいまぶしそう

金城小学校3年 中尾 小麻紀

佳作 もみじの葉ひらひらおちるじゅうたんだ

平田小学校3年 樋口 瑛心

佳作 頑張ったいちだんけつ運動会

城西小学校3年 近藤 蓮夏

佳作 ゆきだるまかおをつけたらかんせいだ

城北小学校3年 土谷 結羽

佳作 すてきですゆうひにそまったあかとんぼ

城東小学校3年 寺村 真尋

佳作 夏の海夕日がしずむあそこから

城東小学校3年 池田 龍馬

入選 もみじの葉とおりすがりにまいおちる

稲枝西小学校4年 西村 菜那

入選 初日の出水平線からのぼりゆく

旭森小学校4年 青木 柊馬

入選 きこえるねみをすますとスズムシだ

旭森小学校4年 小寺 優結

入選 ひがんばなもえてるようにさいている

旭森小学校4年 金沢 沙那

入選 トンボの子ぶんぶんとんでそらのたび

旭森小学校4年 米澤 結菜

入選 あじさいがにじ色きれいカラフルだ

金城小学校3年 上坂 菑悟

入選 ヒマワリに水をあげたらおどってる

金城小学校3年 谷川 愛麗

入選 夏みかん風にふかれて良きにおい

金城小学校4年 植田 陽翔

入選 せみのこえ林のなかでミンミンと

城北小学校4年 辻 惣一郎

入選 あさがおのつるがのびたよくるくと

金城小学校4年 岩崎 大知

入選 さつまいもきいろほくほくあまいあじ

平田小学校3年 下出 奏翔

入選 こおろぎのいい声ひびく夜の声

城西小学校3年 本田 紘生

入選 キリギリス夜にみんなで合しようだ

城西小学校3年 平島 瑛斗

入選 いわし曇鱗みたいで綺麗だな

城西小学校3年 小菅 蒼真

入選 やまのこで自然感じる秋いいな

城西小学校4年 秋吉 綾乃

入選 秋のかぜお米がゆらり帰ろうか

稲枝東小学校3年 薩摩 栞

入選 そうめんがのどにつるんとおいしいね

旭森小学校3年 山田 直弥

入選 あかとんぼえだにとまってひとやすみ

稲枝西小学校3年 柴田 にこ

入選 緑の葉黄色にそまり秋が来た

若葉小学校4年 中谷 彩花

入選 虫の音に耳をすまして星を見る

稲枝東小学校3年 中村 瑠那

入選 スズむしやリンリンひびくかぜにのり

平田小学校3年 野村 泰生

入選 つぶつぶのぶどうをたべて手むらさき

平田小学校3年 門内 優真

入選 秋祭り遠くでたいこ聞こえてる

城東小学校4年 高橋 佑心

入選 ゑびす講屋台があるよ何買おう

城東小学校4年 大照 瞬太郎

入選 むしのこえきれいなおとをひびかせる

平田小学校3年 江畑 柊菜

入選 秋日和雲一つない良い天気

若葉小学校4年 大脇 凌眞

入選 さようなら真夏の暑さやと去る

平田小学校4年 木南 瑠南



【小学5年生・6年生】

特選 食卓に並ぶ新米白い富士

稲枝西小学校6年 上林 眞彩

（評）春の田植えから夏の猛暑をへて、いよいよ稲刈り。たくさんのご苦労、お世話があつて収穫された今年の米、「新米」。炊きあがつたご飯のいい香りが食卓に広がり、これから家族で味わわれるのですね。盛り付けられた新米の白さ・形を雪をかぶった富士山に例えた発想は素晴らしい。季語は「新米」（秋）です。

（彦根文芸協会 北川 則子）

特選 スイカわりわれるといいな真っ二つ

金城小学校5年 藤田 優衣

（評）作者はこれからスイカわりに挑戦するのでしょうか。その緊張感や期待感が伝わってきます。「真っ二つ」の音の響きが力強く、句が引きしまります。見事命中し、割れたスイカの真っ赤な果実や、割れた瞬間の音までも連想できそうな句です。スイカは夏に出回りますが、俳句では秋の季語です。

（彦根文芸協会 北川 則子）

特選 みーつけたヒントはかおり金木犀

城西小学校6年 田村 東子

（評）いったい何を見つけたんだろう。読み手には疑問が生まれ、想像力が働きます。「みーつけた」の切りこみ方がうまいですね。次にヒントを出し香りの先へと読み手を導いていく。言葉の選び方や運び方に工夫のある作品です。季語は「金木犀」（秋）です。

（彦根文芸協会 北川 則子）

特選 むねはずむ家族と歩くもみじ道

城東小学校6年 佐渡 大輝

（評）家族といっしょに歩くことも、もみじ道を歩くことも心が踊る楽しい時間です。「むねはずむ」と言い切る心の表現がとても明るく効果的です。秋の季節感をたつぷり味わいながら、美しく紅葉したもみじの道を家族と語らい、歩いて行かれる様子が目に浮かぶようです。季語は「もみじ」（秋）です。

（彦根文芸協会 北川 則子）

特選 くつとばし秋の大空飛んでいけ

若葉小学校5年 立岡 晴

（評）「くつとばし」は、その距離を競ったり、落ちたくつの表・裏で天気を占ったりするとてもシンプルな遊びです。秋の澄みきった大空に思いつきりくつを飛ばすのは、とても気持ちがいいものですね。けり上げたくつが、高く、勢いよく飛び上がっていく光景が目に見えるようです。「飛んでいけ」の五音が句に広がりと勢いをもたせています。

彦根文芸協会 北川 則子

特選 大空に小さく見えるひばりかな

旭森小学校5年 松近 呼春

（評）暖かくなると野原に出てさえずり出すひばり。まい上がると朗らかな鳴き声。がだんだん小さくなり、ひばりはまるで点のように見えます。広い大空とその中にぼつんと見えるひばりの情景が絵のように表され、その感動を切れ字「かな」を使って結んだことに感心しました。季語は「ひばり」（春）です。

彦根文芸協会 北川 則子

準特選 窓を開けふわり舞い込む虫の声

稲枝西小学校6年 大崎 花奈

（評）虫の声と言えば鳴き声を表したり、そのきれいを強調したりすることの多い中で、作者は、「ふわり舞い込む」と表現し、風のように柔らかく入ってきたことをたしかにとらえました。窓を開けた瞬間、耳に入ってきた音に素早く反応し、その感じ方を十七音にうまくまとめられました。季語は「虫の声」（秋）です。

彦根文芸協会 北川 則子

準特選 かぜがふくすすきの家族がはしゃいでる

金城小学校5年 西内 瀬凜

（評）作者は、すすきを人間のように感じて句を作っています。単にゆれているではなく、「はしゃいでる」という、まるで子どもが喜び回っている様子を思い起こさせる独特の表現が、「家族」とつながってとても動きのある作品になりました。中の句の「が」ははぶいて、「すすきの家族」と七音にするといいですね。季語は「すすき」（秋）です。

彦根文芸協会 北川 則子

準特選 空見上げ花火が散ったパラパラと

金城小学校5年 近藤 優伍

（評）花火は打ち上がった瞬間、満開に開いた大輪、そして終わりをづけ、消えていく花火。それぞれに姿を変え、わたしたちを楽しませてくれます。花火の終わりに心ひかれ、消えて行く花びらを名残惜しく見上げる作者の様子が目に浮かびます。「パラパラ」の片仮名づかいで変化が生まれリズム感のある句になりました。季語は「花火」（夏）です。

彦根文芸協会 北川 則子

準特選 やいほたるおまえはなんで光るんだ

城西小学校5年 小川 遥斗

(評) いきなり「やいほたる」と人間に対するように呼びかける句の始まりに、強く印象づけられます。おそらく、光を放っているほたるが目の前にいるのでしょう。ほたるへの親しみ、愛着を感じながら、素朴な疑問をそのまま作者の言葉として句に表しました。季語は「ほたる」(夏)です。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 秋の空組体操がそびえだつ

城西小学校5年 玉田 毅心

(評) 運動会の盛り上がりは何といつても組体操。残暑のきびしい中、なんども練習を重ね、本番に備えられたのですね。みんなの力と技、気持ちが一つになつてみごと塔が立ち上がった時は観る者も演技する者も感動です。秋空に堂々とそびえたつ組体操。運動場いっぱいに拍手と歓声が鳴り響いたでしょうね。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 どんぐりはかわいく見えて踏めないの

城西小学校6年 谷垣 和佳

(評) 秋も深まってくると森や林はもちろん、学校や公園などにどんぐりがたくさん落ちているのを見かけます。形や大きさ、種類も様々です。作者は落ちているとどんぐりに「かわいく見えて」と愛らしさを感じ、踏まないように注意してそつと歩いていることがうかがえます。「踏めないの」から自然を愛する優しい気持ち伝わってくる作品です。季語は「どんぐり」(秋)です。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 放課後の空見上げればいわし雲

城西小学校6年 安澤 佳音

(評) 授業が終わりほっとする放課後。ふと見上げれば空にはいわし雲が広がっている。昔から、この雲が現れるといわしの大漁があるということから、いわし雲と呼ばれたそうです。青く澄んだ空に小さな雲のかたまりがうろこのように集まっている情景に心奪われている作者の様子が目に浮かびます。季語は「いわし雲」(秋)です。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 ぶどう狩り笑顔一面お母さん

城西小学校6年 西澤 柑奈

(評) 家族でぶどう狩りに行き、特に喜びを感じられたお母さんの表情を「笑顔一面」という言葉で表現されました。お母さんはきつと、この日を楽しみにされておられたでしょう。はさみの手を伸ばしながら、ていねいに房を切り取り、収穫の喜びを伝え合っている家族のあたたかい交流が伝わってくるようです。季語は「ぶどう狩り」(秋)です。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 夏の琵琶湖に浮かぶ白い船

城東小学校5年 中村 諒成

(評) 夏の琵琶湖には、たくさんヨットやボートが行き交い、時には大型客船も運行します。白い船はどんな大きさだろう、「うみのこ」かなと想像がふくらみます。青い水面に白い船が浮かんでいる光景は、夏の琵琶湖を絵に切り取ったような美しさが印象に残る作品です。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 休日に親子で作る栗ご飯

城東小学校6年 若林 美月

(評) 家の人が作る栗ご飯もおいしいですが、親子で協力して作る栗ご飯は格別ですね。時間のある「休日に」に、意味を持たせ、さらに「親子で」と加え、情景を広げていく方法はわかりやすいです。親子で会話を弾ませながら調理する時間は楽しいでしょうね。なごやかなあたたかい雰囲気を感じられる句です。炊きあがってくる時の甘い香りが漂ってきそうです。季語は「栗ご飯」(秋)です。

(彦根文芸協会 北川 則子)

佳作 十五夜をお団子たちが見上げてる

旭森小学校5年 藤本 彩乃

佳作 日が落ちるこっそり顔出す望月よ

稲枝西小学校5年 仲村 春乃

佳作 秋空に吸い込まれてくホームラン

亀山小学校5年 河野 馨

佳作 もりのなかによきときのこがのぞいてる

旭森小学校5年 一宮 佳歩

佳作 さんまにはだいこんおろしたいうように

亀山小学校6年 吉川 裕人

佳作 きれいだないねのほなみがひかっている

亀山小学校6年 永江 広奈

佳作 満月だ外の景色は国宝だ

金城小学校5年 西村 麻央

佳作 春になり待ちに待ったクラスがえ

城西小学校5年 土川 楓華

佳作 雨上がりどこから香る金木犀

城西小学校6年 三宅 舞佳

佳作 冬どなり本を選んで急ぎ足

城東小学校5年 西田 楓

佳作 弟と拾った木の実背くらべ

城東小学校6年 横山 美羽

佳作 梅雨の日の雨の音楽ぽつぽつと

金城小学校6年 市村 愛奏

佳作 ワクワクだ運動会がついに来る

高宮小学校5年 菅森 みず希

佳作 願い乗せ夜空を走る流れ星

佐和山小学校6年 大前 さくら



入選 秋空にスタート鳴ってかけぬけた

城東小学校6年 伊藤 真央

入選 きれいだな青い空にいわし雲

旭森小学校5年 北村 優月

入選 ザクザクと色とりどりの落ち葉踏む

旭森小学校5年 深田 多絵子

入選 木々のなかまつぼくりのかくれんぼ

旭森小学校5年 島崎 陽彩

入選 火のような真っ赤なもみじ落ちてゆく

稲枝西小学校5年 安居 祐梧

入選 紅葉の木とても素敵なまう姿

稲枝西小学校5年 河合 志音

入選 夏の海水平線が輝くよ

稲枝東小学校5年 牧野 輝

入選 いてててていがの中にはあまいくり

亀山小学校5年 大方 真心

入選 梅雨入りだ雨がぴちぴちいい音だ

金城小学校5年 澤田 悠羽

入選 紅葉が山を染めてる模様替え

金城小学校5年 小谷 優理

入選 入学式待ち遠しいなあと二日

佐和山小学校5年 今井 翔太

入選 冬の朝周り広がる銀世界

城西小学校5年 中村 仁乃

入選 金木犀ふわっと香るいい匂い

城西小学校5年 北村 寧音

入選 赤トンボ私の指先とまったよ

城西小学校6年 山本 輝

入選 こうようがかぜでまいおちてのひらに

城北小学校6年 及川 桜

入選 かわいいなしかがどうろをわたってる

城東小学校5年 松浦 いのり

入選 八十祖母と今年もホタル見うれしいな

城東小学校5年 野々村 航太

入選 本読むぞ読書の秋だ小説だ

高宮小学校5年 安居 泰生

入選 虫の音が聞こえてくるよこちよい

平田小学校6年 磯崎 隼来

入選 運動会走って走って走ったよ

城東小学校5年 寺村 実結

入選 腹の虫さんまの匂い踊りだす

城西小学校6年 神野 裕輝

入選 年越しでカウントダウン楽しみだ

城西小学校5年 北川 杏

入選 夏まつり色んな屋台どれにしよ

金城小学校5年 尾本 陽菜

【中学生】

特選 秋晴れや友といっしょにかげおくり

西中学校3年 北村 郁人

〔評〕一読、戦争をテーマにした国語教材「ちいちゃんのかげおくり」を連想しました。今も世界のあちこちで争いは絶えません。平和への祈りのような句です。句材に独自性があり惹かれました。映像も鮮明で、作者と友だちの影が澄んだ秋空に浮かぶ様子も見えてくるようです。季語の選択も素晴らしかったです。

(彦根文芸協会 北村 浩子)

特選 星月夜まるで私の宝箱

西中学校3年 鳥越 楓

〔評〕「星月夜」が秋の季語です。月が出ているかのように明るい星空のことです。星空が私の宝箱だという詩的把握にうっとりしました。特に「宝箱」に見立てたところが秀逸で、さらに「私の」と言ったことで、星空を独り占めにしている感じも出せました。星の美しい夜、極上の時間を過ごしたことでしょね。

(彦根文芸協会 北村 浩子)

準特選 蛍らよ輝け今をせいっぱい

西中学校3年 前川 将輝

〔評〕「蛍」が夏の季語です。この句は力強い表現で蛍へ呼びかける形となっています。このように呼びかけや語りかけの表現を用いて個性的な句とすることもできます。蛍はしつとりと詠まれることの多い季語ですが、中学生らしい思い切った言葉選びが新鮮でした。儚い小さな命に対する優しさも伝わってきます。

(彦根文芸協会 北村 浩子)

準特選 秋風が心を洗う登下校

西中学校3年 田中 結人

〔評〕いつまでも暑かった夏がようやく終わり、涼風に秋を感じた作者。さらりと気持ちの良い風に心も軽くなる様子が「心を洗う」という表現からよく伝わってきます。他の季節の風ではなく「秋風」という季語がとてもよく効いていて、表現も詩的で感心しました。皆さんも登下校の時、季節を感じてくださいね。

(彦根文芸協会 北村 浩子)

準特選 風鈴や風とあそんで踊る影

西中学校3年 世森 愛唯

〔評〕この句には擬人化が使われています。「風とあそんで踊る」の部分です。人ではないものを人に見立てて表現することで、生き生きとした句になりました。また、風鈴という季語の中に音の情報は含まれているので、映像を描いたところが上手く、さらに踏み込んでその影を見せたことで、一層秀逸な作品となりました。

(彦根文芸協会 北村 浩子)

佳作 秋風や中古の服にマイネーム

西中学校3年 牧野 圭佑

佳作 静寂の夜気に漂う雪の花

西中学校3年 黒柳 遼

佳作 通学路ただひとつ咲く彼岸花

西中学校3年 植田 周佑



入選 咲きほこる桜にうまる彦根城

西中学校3年 林 実陽菜

入選 稲実る黄金色の田んぼかな

西中学校3年 濱岸 遙真

入選 声援や熱気あふれる体育祭

西中学校3年 北原 怜和

入選 秋つばめ空に飛び交う親も子も

西中学校3年 坂本 千香子

入選 家の前薫りでニヤリ秋刀魚だな

西中学校3年 中川 博之

入選 彦根城桜満開咲きほこる

西中学校3年 森田 莉愛來

【総評】

令和六年度は小学生三三〇四句、中学生二〇三句の応募がありました。

家族との交流や学校生活の一場面、身近な自然とのふれあいなど実際に体験したこと、観察したこと、感じたことなどを素直に詠んだ作品が多く、その時々場面を想像しながら時には、頬をゆるませ、楽しく選句させていたきました。その中で、五・七・五のリズムや言葉選びにすぐれているのに、季なし（季語がない）や季重なりの作品があり、残念に思いました。俳句の基本、「季語は一つ」「十七音（五・七・五）の詩（文章ではない）である」を知識としてしっかり持ち、句づくりのぞんではしいと思います。また、書きとめるだけでなく、つぶやきながら句を整えていく作業もできるといいですね。

あたり前の中の新しい発見、心が動いた瞬間、自然の不思議さや神秘などを敏感にとらえること、感じたことを自分の言葉で表現することを大切に、これからも俳句づくりにチャレンジしてください。

（彦根文芸協会 北川 則子）

*選者の先生方の感想

〈低学年〉

見たまま、感じたままの作品がたくさん投句されていました。生活科の学習の後に作られた作品がたくさんありました。低学年でも、俳句は十七音で構成される最も短い詩であることは、ほぼ理解されています。しかし、その中に季語が一つ入ることの理解はまだまだこれらのようです。

その子なりの言葉のチョイスが読み手にいろいろな想像をさせてくれました。また、五感を使って詠んだ俳句が何点かありました。その言葉の使い方は新鮮で、的を絞って物を視る視点は素晴らしいと思いました。

〈中学年〉

実際に経験したり見たりした中で、気づいたこと（発見したこと）やおどろいたこと、心が動いたことを自分らしい言葉（きらりと光る言葉）で表現しているすばらしい俳句がたくさんありました。ひとり言や話した言葉をそのまま使った生き生きした俳句もみられました。表現しようとしている発想や内容はとてもよいのに、季語が二つある、五七五の十七音になっていないという俳句の約束が守られていない作品が多くあり、惜しいと思いました。俳句の約束にそうように、作りなおすという句になると思います。

〈高学年〉

目の前の自然や、家族とのかかわり、学校生活を題材にした句が多く、中には「擬人化（物を人間に見立てて表現）」や「たとえ」を使った工夫された表現の仕方がありました。言葉の世界の豊かさを感じました。情景を詠んだ句では、絵を見るように景色が現れ、感動している作者に共感しながら味わっていただきました。

〈中学生〉

学校行事や部活動、受験勉強などに取り組む中から生まれた、中学生にしか詠めない句、素直な感情を詠んだ句など好感が持てる句も多くありました。俳句のいろはを覚えれば、もっと素晴らしい句に仕上がったと思われるものもあり、その点が残念です。推させていたたいのは、映像の鮮明なもの、詩的な表現の工夫のあるもの、季語が主役になっているものです。中学生には、繊細な感覚で若者らしい句をどんどん作ってほしいと思いました。